

バギラティ 2 峰南西壁

織田博志

バギラティ 2 峰 (6,512m) は、バギラティグループにあって最も北にあるピークである。私たち日本バギラティ登山隊は、1 峰南稜と 2 峰南壁の 2 つの目標にチームをわけた。酒井秀光 (45歳) リーダー、富田雅昭 (38歳)、馬目弘仁 (25歳)、私 (43歳) の 4 人が 2 峰チームを形成した。私は、1994 年 9 月 11 日先発隊として成田よりニューデリーへ向った。以下は、その記録と所感である。

行動

- 9 月 11 日 先発隊 織田博志、北山幹郎
成田発 ニューデリーへ。
- 15 日 本隊 ニューデリー到着合流
- 16 日 日本大使館、IMF 訪問のちチャーターバスでリンケシへ。
- 17 日 リンケシ〜ウツタルカシー
- 18 日 ウツタルカシー〜ガンゴトリ
- 19 日 キャラバン開始。

アプローチ・マーチ

25kg の隊荷を背にしたポーター達とカンゴトリを出発した、狭い谷あいはやがて広くなりバギラティグループ、メルーが望見できるようになった。きょうの宿泊地ボージュバーセに到着した。バギラティ 2 峰の頂稜が輝いている。杜甫の“望岳”の一節にある“会当凌絶頂 一覽衆山小”まさにこの気分である。明日はベースキャンプとなるナンダンバンだと思ふと急に気分が高まってきた。

9 月 20 日 ナンダンバンへ到着した。早速隊荷整理にかかる。明日から ABC まで荷上とルートの偵察が始まる。気温の変化と砂埃りのせいで喉が痛く風邪の症状が出て体調が良くなかった。馬目も体調が悪く翌日の行動は、酒井・富田で偵察となった。

偵察、順応と荷上げ

私は、風邪をひきこみ森ドクターより薬をいただき 1 日中寝ていた。高野・馬目も高山病の症状が出て不調だった。私が寝ているあいだに ABC 予定地までの荷上げが開始された。

翌日 22 日、体調は戻り南壁 ABC 予定地まで行く。リエゾンオフィサー カラン・シンとハイポーター 2 人、酒井、織田の 5 人で歩きにくいアプローチを登高した。南壁を酒井、織田で偵察する。私達 2 人の意見は、落石の危険が大きい岩壁だと強く感じた。唯一の安全なラインは、南壁左端になる南西稜と思われた。この日、高野・富田は順応のためボージュバーセへ下る。馬目は BC 停滞となる。

23 日 酒井と協議した結果、南壁はあまりにも外的危険が大きいと判断して南西稜の偵察に出かけ

1. 登山記録

ることになった。偵察の結果、唯一外的危険が少ないルートであると判断した。ABCのキャンプサイト4,900mの地点を整地し、ルートの始発点ができあがった。十分な広さがありABCの目安は付いたが、水が取れないのが最大の問題となる。

この日、馬目がボージュバーセに下った。高野・富田がBCに復帰した。1峰隊のABC建設にむかっの荷上は、距離が長いので精力的に続けられていた。

24日 酒井、織田、富田休養。午後、ルート決定のためにミーティングをひらく。馬目もBCへ元気に復帰してきた。ミーティングの内容は、落石の危険の大きい当初予定していた南壁を放棄するかしないか。南西稜をルートとして採用するかどうか。水の問題などが話合われた。富田・馬目がABC予定地へまだ行っていないので2人に偵察してもらってからということで結論した。今日も良い天候だ。この天候が続く限りバギラティ2峰の望みは断たれることはないだろう。

25日 富田・馬目で偵察に出発。高野も順応のため同行する。富田・高野で南西稜、馬目が南壁へむかった。酒井・織田は、東面へ偵察に行く。森ドクターも順応のため同行する。5,300m地点から東面下降路をじっくり偵察することができた。東面はバギラティの南西面と違い、白い山々が眺められ、ヒマラヤらしい氷河があった。カラン・シンの言うとおりの富士山吉田大沢をきつくした氷雪の斜面が頂上まで続いていた。下降に必要な装備を計算する。富田・馬目のルートに対する意見を楽しみにBCへ戻った。

夜のミーティングで南西稜上にABCを設営して、南西稜から頂上を目指すことに決定した。下部はルートを開拓後、ロープをフィックス、順応と工作を続け、上部はビバークをしながらのファイナルラッシュのタクティクスを計画した。明日以降、本格的な行動に入れると思うと気持ちが高まった。

26日 水の問題はパッキングケースとして利用したプラスチックの樽を水がめがわりに使用することで解決した。10ℓのポリタンク2個で水の荷上を始めた。ABC予定地へハイポーター、カラン・シンと共に荷上した。天候は依然として良い

ルート工作

27日～29日 馬目・富田で南西稜のルート工作。南西壁側に1Pラップルして南西壁に7Pの地点までルートを伸ばした。酒井・織田はその間、BCで休養した。29日、酒井・織田はABCへ荷上し、明日からのルート工作の準備にかかる。富田より交信が入り、ポーランド隊、ユーゴ隊のルート工作跡があるとの報告があった。1峰隊との交信では、氷河のルート工作は氷雪の状態が硬く、全んどアイスピトンアンカーに使っていると知らせてきた。2峰隊の予備を補充するようにした。富田・馬目はBCへ下り、私達と交替した。

30日 ABCからの景観は群を抜いている3峰の西壁のスパニッシュルート・ユーゴルート、スコットランドルートが真近に迫り、ふり返ればシブリンの雄姿が美しい。ABCより織田・酒井でルート工作に出発。6時20分。前日工作終了点着10時、太陽を浴びる時刻となり気分が良い。今回の

1. 登山記録

核心部と思われる部分の工作だ。垂直の花崗岩に挑む。右よりのクラックから入り左上する。しかし、クラックはすぐに閉じ、ヘアークラックとなる。ナイフブレードのネイリングを続ける。わずかに入るのみでタイオフの連続だ。エイリアンの効きそうなクラックを見付けてほっとする。ロープが、いっぱいになったのでアンカーを作りバックロープを固定する。プロテクションを回収しながらラッペルする。酒井がユマーリングしアンカーの補強ボルトを設置している間、次のピッチのための準備をする。酒井のコールの後、ユマーリングしてアンカーへ。テラスがないのでビレイシートビレイとなる。次のピッチは、悪いクラックをつなぎ登る。時間がきたのでピッチ途中で下降する。14時終了。アンカーにギアを整理して吊す。ABCへむけてラッペルでフィックスをたどる。ABC着16時。この日、富田はBCで休養。馬目はABCへ荷上をしてきた。水がめの中には十分な水がたまっていた。

10月1日 織田・酒井でルート工作。馬目とともに荷上をしながら昨日のスタート地点へ到着した。6時20分発。終了点11時着。この上は弱点のない垂壁だ。右へ振りしながらクラックを探すがなく、ユーゴチームはもっと右側を登っているようだ。リベットの穴明作業となる。5本目で右へ3m振りをしてクラックラインと合流した。フリーとネイリングで登る。傾斜は少しあるがテラスに着いた。ナイフブレード2本とキャメロットでアンカーを作りバックロープをフィックスする。後続がユマーリングしている間に、ボルトを1本打ち補強した。次のピッチはフェイスを左上し、かぶりぎみのクラックをフリーで登る。西壁がすっぱり切れ落ち高度感が凄い。ピラーが終了したがテラスは無い。前方には、両側が切れ落ちたカンテ状の岩場が続いていた。アンカーはピナクルにスリングとボルトを1本で作成した。ここに登攀具を荷上してデポジットする。14時40分。ABC着16時20分。夜のミーティングで酒井リーダーより指示がある。前線が遠くなったのでビバークが必至となる。織田・馬目でルートを延し、酒井・富田で荷上げとなった。

2日 織田・馬目でABCを先発、毎日の早朝発は勤務時間に遅れずに行くサラリーマンのように慌ただしい。ビバーク予定地9時着。余分なものはデポジットして先へ進む。昨日の終了点で準備をして馬目・織田で登り出す。水平リッジ。両側がスッパリ切れ落ちた所だが技術的には容易だ。2Pたどりピナクル基部へ。きれいなクラックラインがあり馬目は楽しそうに登りきった。5.9のフリーだ。リッジに登攀具を置きラッペルでビバーク地へ戻る。天候のパターンは、午前中は快晴で午後14時頃より雲におおわれ雪が降る状況であった。ビバーク地は、酒井・富田により整地されツエルトが張られていた。シュラフも有りビバークではなくキャンプとなった。幸いこのキャンプには氷があり水が取れる。砂が多く混り上澄だけを使わなければならないが、水の荷上を考えると大いに助かった。夜、星空はとても美しくガンゴトリにいることを強く意識させてくれた。

3日 9時発。太陽のあたりが遅いので寒く、久し振りの時差出勤となる。織田・馬目で登り出す。ユマーリングをして途中、フィックスの調整とアンカーを補強して昨日の終了点へ。3P拓きテラスへ。テラスより右へバンド状をトラバースして浅いジェールドルへ入る。左側スラブをアルパイン

1. 登山記録

フィーレのフリクションを効かし登る。レッジ手前はラープを1本打ち乗越した。キャメロット3個でアンカーを作る。上部はあと2ピッチで破碎帯となる。十分に上部を偵察しているうちに雲が拡がり15時頃、今までと違い嵐となった。雪はどンドン積り出した。岩場の様相は一変した。撤退という感じで滑る足元に冷汗を流しながら下降した。フィックスが無ければ難渋しただろう。ビバーク地に着く頃、酒井のコールが聞こえた。酒井が出迎えてくれお茶を飲みほとした。富田は先にABCへむけて下り出したという。心配になり後を追う。ビバーク地からの下降は、増々滑り苦労した。フィックスが無ければもっとつらいめに会っていただろう。先行している富田を酒井は、気使う。ABC近くまで来た時陽が暮れ、ヘッドランプを出す。ABC手前の何歩かが嫌らしく慎重に通過した。19時40分ABCへ戻った。ほっとしてハーネスをはずしお茶を作る。連日の行動で疲労していた。この夜は夜更しをしてしまった。

4日 私は7時40分まで目覚めなかった。一度起きてしまうと仲々寝つけず食事の準備をする。太陽は昨日の嵐が嘘のように輝いている。雪も融けだした。外で食事をする。ミーティングが始まり明日からファイナル・ラッシュアタックと決定した。1峰隊より交信が入る。日程とルートを考え1峰隊は撤収を決定した。残念だ。2峰隊も残りの日数を考えると5日からのビバーク・ラッシュしか方法が無くツェルト1張、コップェル、ガスコンロ、ガス大2個、食料、アイスピトン6本、スノーピケット4本を準備する。個人装備としてシュラフカバー、羽毛服、ピッケル、アイゼン、アイスバイル、ヘッドランプ、テルモスを用意した、各自結構な重量となった。

ファイナル・ラッシュ 頂上へ

馬目・富田は5時発。酒井・織田はABCの整理をして6時40分出発した。ユマーリングを続けていくと先行パーティが核心部のユマーリングをしているのが見えた。時間がかかっているようだ。今日は雪どけのためか落石が横をかすめていく。核心部で回収したフィックスを1本バックロープにして続く。前回終了点へ着くと馬目がリードしただけであった。上部にはビバークに適した所が無いので時間も考えて手前のテラスでビバークの準備を始めた。雪集めに手間取る。ツェルトを1張なんとかセットできた。2P伸ばして馬目が戻った。やはり寒くなり厳しいビバークを予想させる。富田の戻りが30分遅れ彼のスピードダウンが気になる。

6日 昨日のビバークは狭く寒い、つらいビバークだった。夜半、風も出て我々4人の存在がいかに小さなものか体で知らされた。長い夜もようやくあけた。今日も好天に恵まれた。上へ上へ登ろう。馬目、富田、織田、酒井の順で行く。もう頭上には黒と白の破碎帯があり落石と浮石に気を引き締めなければならない。慎重に時間をかけて馬目がリードする。破碎帯の上は、氷と岩のミックスとなる。アイゼンを装着して続く。ようやく氷雪壁へ出た。頂上は間近に見えていた。しかし、実際は距離があった。今日中に抜きたいと思い氷雪壁を登るが高度の影響と重荷のためか仲々ペースが上らない。それでも頂上へつながる雪稜によりやく出た。雪稜は雪壁となって続く。恒例の雪嵐につかまる前に

1. 登山記録

頂上へと思うが、ここから実に長かった。馬目がロープを伸ばしフィックスしている間に、雪面をL字に切り出しツェルトを張れるプラットを作りだし始めた。十分なテラスができ、昨夜よりは広い所でビバークできることになる。富田がスレート状の岩を何枚も風よけのためサイドに立ててくれたので風の影響も違うだろう。4人がツェルトの中に入る頃、気温は下り嵐がやってきた。昨日のことを思えば水不足も解消し脚も十分伸ばせるのだが、食料が乏しくなった。富田が風邪の症状が出て調子が悪い。下へむかっての撤退は破碎帯があるので論外だ。我々にとって頂上へ抜ることが唯一の道となった。富田の具合が悪化したのでBCと交信する。森ドクターから指示を得た。3人がしてやれることといえば暖かくすることとお茶と食事を作ることぐらいだ。不安な一夜となった。外は風が強い。

7日 うとうとしたら寒気で目覚めるというパターンを飽きるほど繰返したがようやくすっきりとなった。今日も快晴だ。今日のリードは私だ。頂上を目指して出発する。2Pフィックスをたどり、1P雪壁を登る。続いて3Pスノーリッジ、岩のミックスを登り、頂上直下と思われる氷雪壁となる。5P登る。北面が足下に見える。もう1P登ると左に雪庇の出た稜と合流した。小さな所を崩すと頂上が見えた。左に東面氷河が広がるのが見え、うれしかった。ナイフブレード2本でアンカーを取り後続してもらおう。そこから酒井、馬目、富田、織田の順で登頂した。10月7日12時30分だった。BCと交信し登頂を伝える。山本隊長より下降にくれぐれも注意するようにと指示がある。BCへ安全に帰幕して初めて成功なんだと全員気を引き締める。頂上は思ったより狭くインド国旗が残されていた。記念撮影も終わり13時5分東面通常ルートで氷雪壁を下降するために下山を開始した。1Pラッペルしてアンカーを作りそこより左下へアンサウンドな岩場を15m下降する。スノーピケット2本でアンカーを作り1Pラッペルする。それより100mラッペルし、後はバックで前爪を効かしロープなしで下る。徐々に傾斜は緩み前向きで下れるようになる。落石をさけるために右に左にルートを選ぶ。私が先行する。長い下降を続けヘトヘトになってきた頃、眼下のモレーンを登ってくる2人を見つけた。柳沢先生と森ドクターだった。昨日からの交信で心配して迎えに来てくれたのだ。うれしく、感動して涙が溢れた。全員が合流した頃にはもう16時を過ぎていた。北山さんはお茶やラーメンを作って待っていてくれた。腹ペコの私達にとってこれ以上の食事は無かった。カラン・シンも出迎えてくれ全員でBCへの道を下った。

BCへ還る

ヘッドランプをつけてもうすぐBCという所でハイポーター達も出迎えてくれた。BC着19時30分。山本隊長、高野隊員も豪華な手料理を作り我々を待っていてくれた。サクセスパーティの準備には驚いた。飾りつけが楽しかった。我々のバギラティ2峰はハッピーエンドをむかえた。

バギラティ2峰の名称について

これまで2峰の南西面を試登した隊は3パーティある。今回の我々のチームも入れて同じ壁を目指している。岩と雪のクロニクルでは南西壁と名称されている。特に3パーティ目にあたるユーゴチー

1. 登山記録

ムは下部600mを登り我々の22P目で終了していると思われるまでを“ローリングストーンズ”と名称している。ルート中、残置ピトンは8本、ラープ1本、チョック2個があった。上部破碎帯を見て撤退したと思われる。我々のラインも“ローリングストーンズ”と似たラインと思われる。しかし、ローリングストーンズは2峰南西壁の半分にも到着していない所で終了している。ヒマラヤの岩壁では誰も頂上を目指している。我々も頂上を目指した。今回の我々の登攀は名称で言えば“バギラティ2峰南西ピラー”と呼べる。グレードは、アルプスのグラン・ドリュ南ピラー以上の困難度はあった。馬目と話合ったEDというグレードが丁度良いのではと思った。

ヒマラヤのビッグウォールクライミング

今回、私達のとったタクティクスは、果敢な登攀から程遠いものであった。下部をフィックスに頼ってしまった。頂上を目指すためには私達の実力では仕方なかった。またフィックスの回収も2本しかできず非力さに恥る思いです。水が確保できなかったのも要因のひとつです。ヒマラヤの岩壁では10日間位のラッシュタクティクスで岩壁の中で生活しながら工作し、荷上するのが最も秀れたタクティクスと思います。私達はヒマラヤのビッグウォールの初心者だったのだとつくづく感じます。今回、学んだことは多く要約すると次のようになります。

- ① 岩壁の形状、岩質を良く知る。登り出す前に十分な偵察とリサーチを行う。
- ② ルートは荷上を考え、なるべく直線的なラインをとり、傾斜が強い程有利だ。
- ③ 荷上する量の限界を知る。登攀具は金属品が多く重量の半分をしめる。厳選した数量の登攀具のみにする。ボルト類は重く最悪の場合だけを考え、最少限の数量にする。
- ④ 水の取れない所を考え水の予備は必ず用意しておく。
- ⑤ ヒマラヤのビッグウォールはヨセミテとは違い防寒具やプラスチックブーツ、アイゼンピッケル、アイスパイル、アイスピトン、スノーベケットなどが必要でかさ張り重くなる。ヒマラヤのビッグウォールクライミングは荷上に勝つことが成功につながる。荷上システムに慣れておくことが必要である。

バギラティ3峰のユーゴルートやスパニッシュルートは、ヒマラヤのビッグウォールクライミングが到達し得たひとつの頂点を我々の眼前に見せてくれた。我々のバギラティ計画書に柳沢先生が趣旨として次のように書かれている。

“登攀の内容からヒマラヤを見た場合、高山が常に最高だとは限らない。確かに8,000mはスケールが大きく、そこには高さをもつバリエーションが存在することだろう。しかし、クリス・ボニントンが言うように6,000mや7,000m峰は、大きな山が削られて成立した。それ故にこそ急峻で素晴らしいクライミング・フィールドが存在する。ジョン・ロスケリーは、自伝の中で「私がこれまで行ってきた登攀の中で最も充実していたのは8,000m峰でなく、1979年の比較的低いピークの登攀、ガウリ・ジャンカールとウリ・ビアホである」と言っている。登山の本質的課題はクライミングに内在している。”

1. 登山記録

私は、柳澤先生が日頃言われていた絶え間ない日頃のトレーニングと冬季登攀の実践で次へのヒマラヤのビッグウォールを目指したいと思う。最も良いスタイルで果敢なクライミングを目指して。

日本パラギティ登山隊

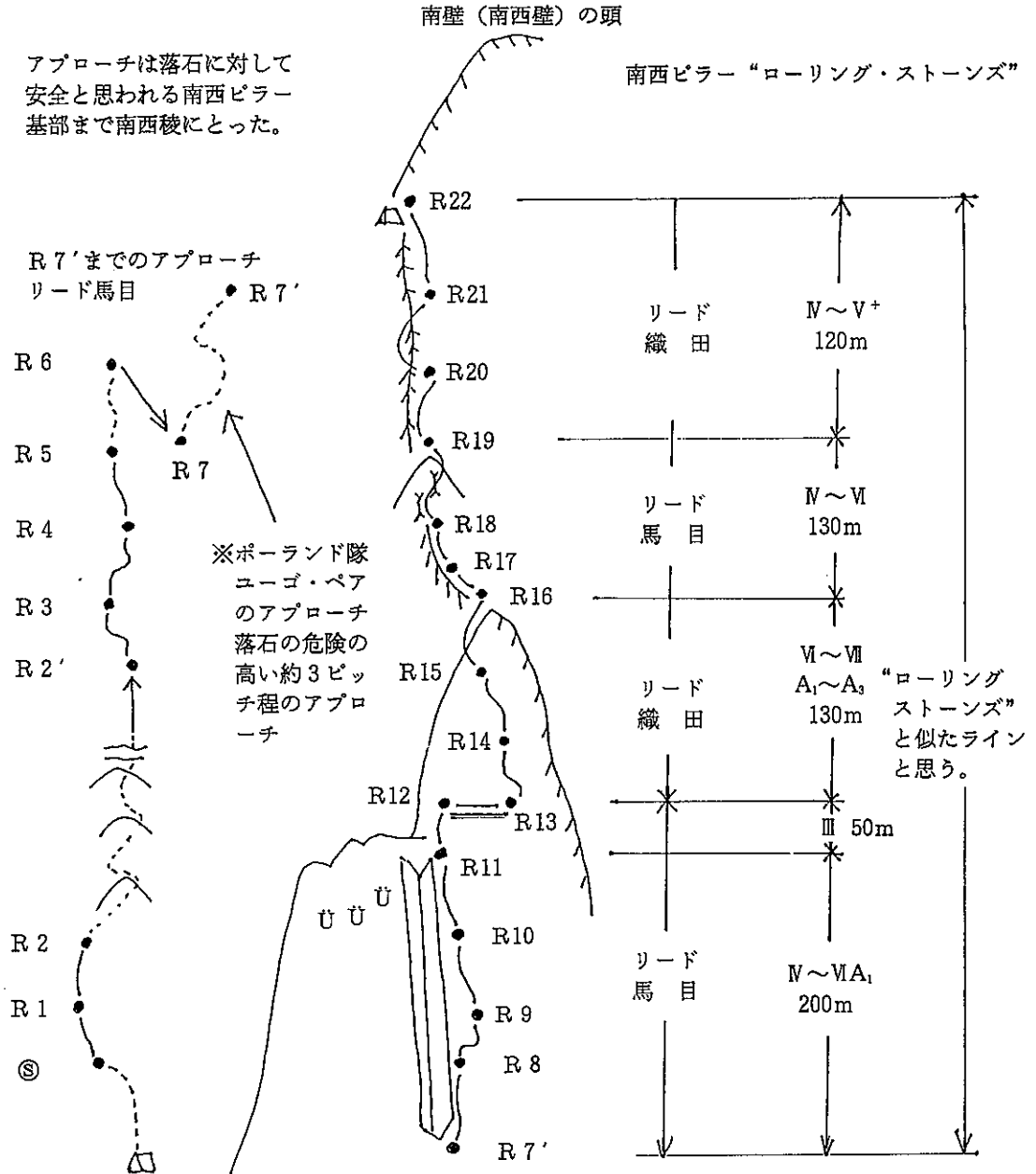
隊長／山本一夫，柳澤昭夫，森紀喜，酒井秀光，北山幹郎，富田雅昭，高野正道，馬目弘仁，織田博志，L. O. カラン，シン

1994年9月15日～10月16日

1. 登山記録

BHAGIRATHI 2峰 南西ピラー ①

(作図：織田)



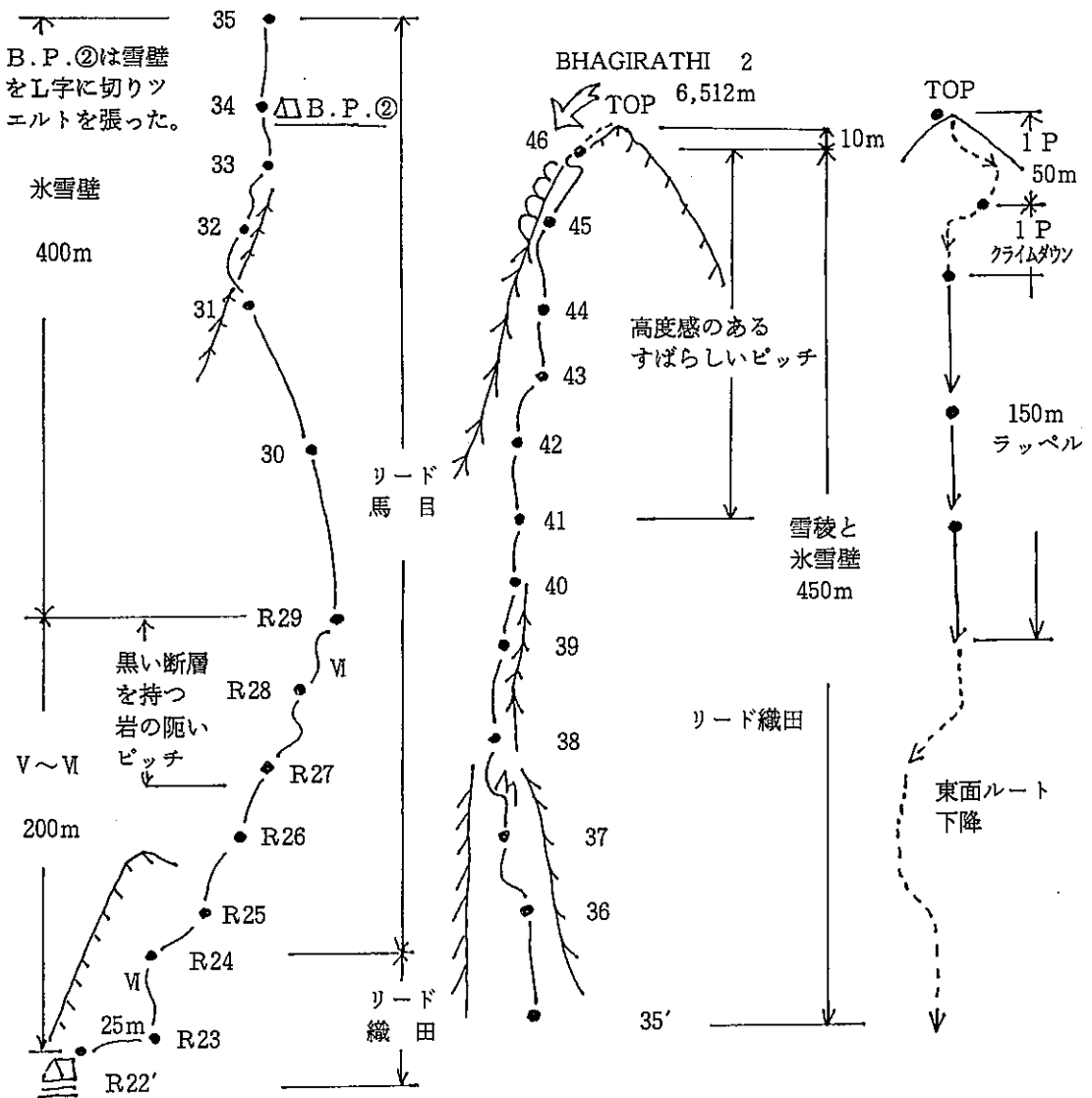
1. 登山記録

R24までルート工作 FIX後ファイナル・ラッシュ 2ピバークにて完登登頂後、東面ルートを下降
 1994年10月5～7日 全員登頂

リーダー 酒井秀光/織田博志/冨田雅昭/馬目弘仁

BHAGIRATHI 2峰 南西壁 上部壁 ② / 下降ルート

(作図: 織田)



1. 登山記録

ガルワール・ヒマラヤではガンゴトリ山群を含む

西部地域が1979年よりOPENされた。

年	国 / 峰	人数	内 容
1979	チェコスロバキア 1 ~ 3 峰	11	東面5,300m BC 2峰と3峰に初登頂。1峰は失敗。 9月21日 BC 10月2日 2峰登頂 Z・ルーケシュ/ J・ストラスキー/J・ヴィタの3名(東面ルート) 1峰は、J・パレニチュク/K・イエロート/Z・ルーケシュ が北稜を目指したが6,556mシュバルツア・タワーで敗退した。 この3人で3峰にむかい、10月8日登頂した。
1980	日 本 1 峰	12	国学院大学隊 松永敏郎隊長らが1峰南稜からの初登頂を目指 して入山。9月1日 6,150mで断念した。
1980	ド イ ツ 2 峰	3	2峰東面ルートから登頂
1980	日 本 2 峰	7	安中秀子隊長 群馬女子隊 隊長と浅野さつき隊員が登頂 9月30日
1980	日 本 1 峰	14	高林久蔵隊長らが1峰南東稜より初登頂で全員登頂した。 9月7日 BC 9月29日から10月2日にかけて成功。 香川県労山隊。初登頂。
1981	イ ン ド 2 峰	6	2峰東面ルートからの登頂 登頂した3人が帰路転落 2人が死亡、1人が負傷した。P.M.ダス隊長。6月。
1981	アイルランド 2 峰	3	イアンレア/ドースン・ステルフォックス/トミー・マガイア が北壁を初登攀した。35P ED。下降中東面をマガイアがスリ ップ。死亡した。9月10日のことである。
1982	日 本 2 峰	7	稜朋会がサトパント南壁を狙い入山。順応のために2峰東面ル ートを目指す。10月18~19日に全員が登頂した。 サトパントは5,300mで撤退した。杉浦誠隊長。

1. 登山記録

年	国 / 峰	人数	内 容
1982	フ ラ ン ス 1 峰	?	エリック・アーノルドが肺水腫で死亡し撤退。ルート不明。
1982	スコットランド 3 峰	2	アレン・ファイフ／ボブ・バートンによりバギラティ・グループ初のビッグウォールクライムが成功。10月8日登頂。約10日間のカプセル・スタイル。14Pまで9月20日までに工作FIXの後のラッシュ。ガンゴトリのビッグウォールの先駆的なクライミングだった。45ピッチのうち30ピッチが岩壁。3ピッチの黒い砕岩帯。あとは頂上直下の氷壁。初登攀。 ※ダグ・スコットらのシブリン東稜(6,543m)1981年だった。
1983	日 本 1 峰	?	1峰。埼玉のボンビックス・クラブ隊6,650mで断念。北稜。ボンビックスピーク(6,550m)と命名。
1984	ス ペ イ ン 3 峰	4	セルジオ・マルティネス／ファン・カルロス・アドリゲル／ホセ・ルイス・モレノ／ファン・アントニオ・トーマスは、カプセル・スタイルで下部エプロンより250mのピラーを登り約10日間で最初のレッジへ。ここに4泊して続く250mのピラーを登り2つ目のレッジで再び4泊。ピラーからオーバーハングを越えあとは2ビバークで登頂した。 (岩と雪105号/105号)ガンゴトリ周辺というよりヒマラヤビッグウォール史に新たな1ページを加えた。5月26日登頂。
1984	日 本 2 峰	5	河合峰雄隊長、大阪歯科大学山岳部が東面より全員登頂。 7月23日 BC 7月28日 C1 5,200m 8月3日 C2 5,800m 8月8日 登頂
1983	日 本 2 峰	3	山岳同志会 大宮 求／久松宏人 東洋大学OB鈴木 章の3人がサトパントと2峰を目指し入山。アルパイン・スタイルで2峰登頂、サトパントも成功。5月6日 BC ABC 4,900m C1 5,250mよりアタック、途中で撤退。東面を5月13日より再びアタック登頂。

1. 登山記録

年	国 / 峰	人数	内 容
1984	日 本 峰 1	6	春日井山岳会隊 鮎沢清次隊長。9月1日 ヴァスキータール 4,900m BC 9月19日 東稜上に出て C 2 6,400m 6,600mで断念。
1985	フ ラ ン ス 峰 3	3	ピエール・ファブル/ジュフ・ルモワーヌ/ギー・メヴェイユ ・ブーヴェ南西壁スペイン・ルートを再登。300mFIX後ビバーク 8回で6月6日登頂。
1985	ド イ ツ イ ン ド 峰 2	5 ? ?	5月東面ルートより登頂。 北面ルートより女性隊が登頂。
1988	ニュージーランド 峰 3	2	キャロル・マクダーモット/フィル・キャッスル 7日を要し9月20日登頂した。北面を下降した。
1988	ポーランド 峰 2	?	ポーランド・カトヴィーツェの7人パーティが未踏の西壁を試 みて遭難。落石で1人(ヤン・ノヴァク)死亡。隊長のクシス トフヴィエリッキが重傷を負った。600m ロープを伸ばした所 で遭難。1985年のポーランド隊にひき続き2回の試みは失敗に 終わった。8月。 ダデウシュ・レヴィ隊長らの別のポーランド隊が西壁を目指し たが、落石の危険を考え、東面より北東壁の岩溝を登り北東稜 を経て登頂した。 ズビニエフ・ミコワイチエク/マリアン・ノバク/ヴァルデマ ール・シムルコ
1989	日 本 峰 1	6	佐々木健臣隊長 会津山岳隊が北稜から登頂。 8月15日 BC 4,800m ABC 隊長はABCにとどまる。 5,400m北稜取付C 1 6,000m北稜上にC 2 9月9日 シュバルツアータワーの下のプラト-6,460m C 3 シュバルツアとボンヴィクスピーク (6,550m) 間のC 4 9月20日 栄利文, 斉藤憲一が登頂した。2次は断念した。 初登攀

1. 登山記録

年	国 / 峰	人数	内 容
1989	ユーゴスラビア 2 峰	2	フランチェク・クネズ／アンドレア・フラストニクのペアは、南西壁を攻めた。9月29日にF I Xして9月30日よりクライム標高差600m 全20ピッチ うち4 P VII/VII ⁺ , 2 PがVII/VII ⁺ で“ローリング・ストーンズ”と命名。
	ユーゴスラビア 3 峰	2	南西壁は'85, '88にポーランド隊が挑戦していた。クネズはヒマラヤのビッグウォールを毎年のように目指している。('87トランゴネームレスタワー南壁 '88メルー北峰東壁)シルヴィ・カロとロビ・スピンは3峰西壁を攻めたが嵐のため敗退した。
1990	ユーゴスラビア 3 峰	2	シルヴィ・カロ／ヤネズ・イエグリッチのペアが前年の敗退から再起し、西壁の真中を直上し最上部ハング帯を右斜上する。スコットランドルートに合流するグレードVII A 4 1,600mを初登攀した。“岩と雪143号”まさにビッグウォールクライミングだった。
1990	韓 国 3 峰	3	ベ・ソユル隊長らは8～9月にかけてスコットランドルートに成功した。クワッグ・ボンシン／ヤンホンサング
1991	イ ン ド 2 峰	26	HBSポケラ隊長, インド国境警備隊 東面ルートから5月20・23日 11人が登頂した。
1994	バ ス ク 3 峰	3	スコットランドルートより登頂。9月。
1990 補	イ ギ リ ス 3 峰	4	ジョニー・ドウズ／ジョー・シンプソン／ポール・ブリチャード／ボブ・ドルーリーが南西壁のスコットランドルートの左手のピラーをこころみた。条件が悪く断念した。 シンプソン／ドルーリーのペアはスコットランドルートの大半をフリーで登った。トウズ／ブリチャードはスペインピラーを試みた。

(バギラティ峰登山隊隊員)